



●●●● 少女雑誌の部屋から ●●●●

今月号で取り上げるのは少女雑誌に小説や随筆などを書いた作家・森田たまです。

わたくしも名前だけは知っていたものの作品は読んだことがなかったのですが、春先に立ち寄った古本屋でたまたま見つけ、彼女の本をはじめ手にとったのでした。そして、その数日後には別の古本屋でまたしてもたまの本を見つけてしまい、プロフィールを調べてみたところ、今年が生誕 130 年の年であることがわかったのです。

そうすると、今度はもっといろいろなことが知りたくなってしまい、今回特集を組んだ次第です。

森田たま

Moriya Tama

1894-1970

北海道札幌生まれ。旧姓 村岡。札幌高等女学校を病気で中退。明治 44 年 (1911) 文学を志して上京、大正 2 年 (1913) 森田草平に師事する。大正 5 年結婚後、しばらく文筆を絶つ。昭和 7 年 (1932) に草平の推薦により、随筆「着物・好色」を発表。昭和 11 年 (1936) 「もめん随筆」、翌 12 年 (1937) には「続もめん随筆」が好評を以って迎えられ、以降も随筆を書き続けた。また、随筆だけでなく、長編小説「石狩少女」、短編集「招かれぬ客」なども刊行している。戦後は昭和 37 年 (1962) から昭和 43 年 (1968) まで参議院議員をつとめた。その間に「ぎゐん随筆」を発表している。

少女雑誌への投稿

庁立札幌高等女学校在学時より、少女雑誌への投稿を始めたたま。投稿欄は数少ない自己表現の場であり、文章を書く修行の場でもありました。『少女世界(博文館)』の主筆・沼田笠峰は優秀な投稿者のひとりであった たまに目をかけ、上京するよう勧めました。

文豪たちとの交流

大正 2 年 (1913)、夏目漱石の門下生だった森田草平に師事したことで、漱石をとりまく文学者(芥川龍之介、久米正雄ら)と出合う好運に恵まれました。それらの人々の興味ある片鱗を知ることのできる嬉しさを随筆の中に書いています。

苦悩の日々

自分の才能に対する絶望や、人生問題に苦しみ、精神的に不安定な状態に陥ってしまったたま。大正 5 年 (1916)、精神的苦悩からようやく立ち直り、慶應義塾学生 森田七郎(実家は大阪の庄屋)と結婚しました。しかし、夫の家族からの反対で、しばらく文筆を断つことになりました。

自伝的小説

昭和 15 年 (1940) 7 月に刊行された「石狩少女(おとめ)」は、北海道生まれの少女の生い立ちと夢を描いた作品で、たまの半自叙伝です。その年の『少女の友(実業之日本社)』10 月号では、村岡花子がブックレビュー(書評)の中で作品を紹介しています。